

【概要】

異世界転生モノ。最初から最強パターン。

転生時に現世での労働時間が経験値に換算、数値化され、社畜として働いてきた横溝 秀真(よこみぞ しゅうま)は最強の力を得て転生。ギルドで高報酬の依頼を週イチくらいでこなし、のんびりと暮らすことを決意する。が、もともと頼まれたら断れない性格のため、いろんな人からの依頼を引き受け人助けに奔走。結果、国からも注目され勇者として魔王退治を命令されてしまう。

【登場人物】

横溝秀真...28歳。社畜根性が身についたサラリーマン。学生時代オンラインゲームにはまっていた。

ラフィア...22歳。僧侶。他人の経験値を奪うスキルを持つ。

【プロローグ】(約900文字)

現代日本。

終電も近くなろうとしている深い時間。ひとけのないオフィスビルのワンフロアだけ、煌々と明かりがついていた。

特段強めでもないタイピング音さえフロアに響きそうな静寂。

その静寂と同化するかのようにじっとPCを見つめていた俺は一度瞬きをし、深いため息をついた。

横に置いている2本目のエナジードリンクに手を伸ばすが、いつの間にか空になっている。他の飲み物もなく、小休止を挟むために一瞬彷徨った手は仕方なくまたキーボードへと戻る。

「これ、明日までに終わるのか？ いや、終わらせなきゃならないんだけど……」

集中力が切れたことにより、思考が正気に戻ってしまった。社畜として一番いらない思考である。

特に秀でた能力があるわけではない。だから頑張るしかない。

けれど理不尽な量の業務を押し付けられて、毎晩遅くまで残業する日々に不満を感じている。

転職をすればいいだけの話だが三十路手前でそんな度胸もない。

結局自分はこうやって社会で生きていくしかなかった。

(あれ……なんだかぼーっとして……)

無駄な思考にリソースを割いたせいか、頭がぼんやりしてきた。

目の前が徐々に暗くなっていく。

まずい、と思う頃には全身から血の気が引いていくような冷える感覚。そのまま椅子から崩れ落ち、床に倒れこんだ。

(さすがにこの生活は……まずかったよな……)

明日の会議に使うのに、この資料どうするんだろう。

引継ぎだって――

仕事の心配ばかりをしながら、俺は立派な社畜として人生の幕を閉じた。

『――前世での労働時間により、7,753,910の経験値を獲得しました』

聞き慣れない機械音声に思わず目を開ける。

「……ここは……？」

きれいな青空。緑豊かな森と青々と茂る草原。そしてそれをなでる爽やかな風。
さっきまでいたオフィスとは比べ物にならない清々しさに頭が混乱する。

(ああ、なるほど、これが死後の世界か……)

そう考えれば納得がいく。
悟りを開いたような冷静さを取り戻し、横になっていた体をゆっくりと起こした。

「……は？」

取り戻した冷静さはあっという間になくなった。
そこには死後の世界よりも理解しがたいものがあつた。

「横溝 秀真……レベル……800…？」

ゲームでお馴染みの”ステータス画面”が宙に浮いていた。

【本編】(約3000文字)

「ファイアーボール！」

白い狼のような魔物に火球がぶつかる。
先ほどまで自分を睨み、低く唸っていた狼はキャンキャンと悶えながら炎と共に消えていった。

出現のさせ方を覚えたステータス画面を慌てて確認する。

「経験値が100増えてる……やっぱりここ……『ヴァルトリア』だ…！」

自分が社畜になる前にハマっていたオンラインRPGゲーム『ヴァルトリア』。
信じられないことにどうやら自分はその世界にいるらしい。

先ほどの魔物はウルフ。初心者時代のレベル上げで何度も倒した魔物で、経験値も覚えやすい
100きっかりだったため記憶に残っていた。

火魔法のファイアーボールも、このなんとなく見覚えのある草原も、ステータス画面のデザインも、ついでにこの全身黒系で揃えた中二病キャラメイクも、当時の記憶のまま。これだけ揃えば疑いようがなかった。

（魔法を放った時に熱い感覚もあったし……これは”現実”なのか？）

「……まさか……転生……？」

現代社会でしばらくブームになっている異世界転生作品。かくいう自分もそんな漫画を読んだことがあった。まさか自分の身にそれが起きるなんて。

「しかもレベル上限の255を超えて…800……」

ステータス画面を見る限り、自分が過去にプレイしていたキャラクターのデータがそのまま引き継がれている。もちろん異常なレベルによる高ステータスは除いて。

ゴクリとつばを飲み込む。

ヴァルトリアでのレベル上限は255だった。自分自身もプレイ当時は120ほどだったというのに、無茶苦茶な数値の、下手すればチートとさえ言われそうなプレイヤーがここに存在していることになる。

運営にBANされるのでは……などという心配もよぎるが、ここが現実世界だとしたら運営はいない。

なにより不正もしていない。自分自身もわけが分からないのだ。

「……ふう」

考えても答えがわからないことは仕方がない。

破格の強さで転生したことから予測される心配事はいったん置いておくことにした。

問題はこれから先。

「……この強さならパーティを組まずに、単独でいろんなダンジョンに潜れるかもしれない」

幸い、前世でプレイした時と同じ魔法剣士として転生していた。

ゲームプレイ時に習得していた基本魔法の上位までをすべて覚えているらしい。

「これなら前にクリアできなかった高難易度クエストだって、一人でこなせるかも」

せっかくの機会だ。楽しまなきゃ損。

これまで会社にささげてきた本来プライベートにあてられたであろう時間分、ここで遊んだって罰は当たらないだろう。

（……そういえば、途中だった資料も翌日の会議も……どうしたかな……）

ふと死ぬ間際の業務を思い出し、胃のあたりが重くなるのを感じた。

（いや、俺は死んだんだし）

こんな状況でも仕事の心配をしてしまうあたり、どうやら転生しても社畜根性は治らないらしい。

ここには自分が勤めていた会社はない。口だけ出して仕事をしない上司もいない。体よく仕事を押し付けてくる他部署の人間もいない。

それどころか最強の冒険者。これはきっと神様がくれたボーナスステージだ。

胸の前で作った握りこぶしが期待で震える。

（このわくわくする気持ち……久々だ。この世界では思い切り好きなことを楽しんで、適度に休息をとって健康的なスローライフを送ろう！）

* * *

「グルル……」

（スローライフを目指した直後にこれとは……）

キラキラとした未来を描いていたのはつい先刻のこと。

今は周囲を魔物に囲まれ、いわゆるピンチというヤツだ。
ウルフよりも倍はデカイ、白銀の毛並みのシルバーウルフが10体ほど。

「すすすみません……巻き込んでしまって……」
「謝るのはここをなんとかした後です」

視線は敵に向けたまま、自分の後ろで震える女性に声をかける。
うす紫色のロングヘアに長めのローブ。十字架を模した杖を持っているので僧侶だろうか。

町を目指して森を抜けようとしていた道中、シルバーウルフに襲われる寸前だった彼女を発見。
とっさに助けたところ、他にいた数匹に遠吠えで仲間を呼ばれてしまいこの状況だ。

（レベル800なら問題はないと思うが……）

問題は彼女。おそらく近接戦闘は不得手である彼女を守りながら戦えるかだけが少し不安だった。
ゲームをプレイしていた当時、圧倒的な猛者でも無かった自分は誰かをキャリーするような戦闘経験がほぼ無い。

転生直後に確認していた習得済み魔法一覧に、回復や防御魔法の類もなかった。

（攻撃全振りの魔法剣士だったからなあ……）

剣士にも魔法使いにも憧れた自分は魔法剣士になったわけだが、両方の性質をあわせ持つせいかゲーム内ではいまいち中途半端な職業だった。
剣士ほどHPも力も高くなく、魔法使いよりMPも低いし覚えられる魔法も少ない。

習得魔法はある程度選べるわけだが、回復や補助はパーティーの僧侶に頼りきりで、自分は攻撃魔法ばかりを選んでいて。

（でもレベル800なんて、もはやレベル上限の剣士や魔法使いよりもステータスが高いんだよな。……よし、ゴリ押すか）

覚悟と、ある程度の戦闘プランを決め、彼女に声をかける。

「そこから動かないでくださいね」

彼女の返事を聞く前に、一番近いシルバーウルフに斬りかかった。

ごく普通の両手剣で数撃をお見舞いすると、シルバーウルフは血しぶきを上げその場に倒れこむ。
そして息絶えると死骸は自然と消えていった。

「……！」

あまりに一瞬の出来事だったようで彼女が息をのむ。

魔法剣士は魔法使いにも剣士にもその特徴的な能力は劣るが、素早さが高く、それを利用し華麗に繰り出される魔法や斬撃を織り交ぜた戦闘スタイルが特徴で、自分はそれが大好きだった。

試しに一匹を倒してすぐ彼女のそばに戻る。

（大丈夫、いける！）

チート級の強さであることを実感し、思わず口角が上がる。

それを油断ととらえたのか周りをかこっていたシルバーウルフたちが一斉に襲い掛かってきた。
自分の目の前のやつらは先ほどと同様に剣で斬り倒し、女性の後方から向かってくるやつらには魔法で牽制する。

「ロックバレット！」

地面から現れた無数の岩の弾丸は、全弾後ろのシルバーウルフに命中。ひるんだ隙に瞬時に後方に向かい斬りかかる。

自身の魔力がどのくらいか把握しきれていないため、彼女の安全を第一に考え範囲攻撃魔法や強力な魔法は避け、ロックバレットやアイスエッジなど、一点集中かつ遠距離からでも牽制できる下位魔法を連発する。
もちろん制御を誤れば彼女の方向に飛んでいく可能性もあるが、今の自分は全くそんな心配はなかった。

攻撃と牽制を繰り返し、彼女に「そこから動かないでくださいね」と言った通り、回避行動でも一歩も動かすことなく周囲の敵を殲滅した。

「……」

「……よし」

キン、と剣を鞘に納める音で茫然としていた彼女は我に返った。

「あっありがとうございます！とってもお強いんですね」

どこか手放しでは喜べないような戸惑った表情でお礼を言われ、自分も苦笑するしかなかった。

（そりゃあ魔法剣士一人であれだけのシルバーウルフを被ダメージ0で倒せちゃあ……そうなるよな……）

「無事でよかったです。あなたの仲間は？」

僧侶一人で森へ来ることなんて滅多にない。おそらくパーティーとはぐれたのだろうと推察して尋ねる。

「いえ、実は一人で……」

「え？」

話を聞けばパーティーを解雇され、次の町へ向かう途中だったという。

時刻は夕暮れ。まもなく夜になる。

こんな状況で「それじゃあ、またどこかで」なんて別れられるわけがない。

そんなお人好しな性格もあって前世では仕事を押し付けられがちになってしまったわけだが……今はそれを言っている場合ではない。

「よければ次の町までご一緒しませんか？ええと……」

「ラフィアです。ありがとうございます。僧侶なので戦闘力が低く……本当に助かります」

「俺はシューマ。よろしくお願いします」

ゲームプレイ当時も名前は本名の秀真を使っていたためそのまま名乗る。

握手を交わしたのち、二人は町へと歩き出した。

ラフィアが少しだけ申し訳なさそうに視線を下に向けたが、俺はその時気にも留めなかった。